奈川の人口
令和8年3月1日現在

総世帯数	288世帯
総人口	543人
男	267人
女	276人

発　行　奈川公民館
発行者　奥原広幸
編集者　公民館報編集委員会
印　刷　(株)プラルト

野麦峠まつり「労働遺産」認定

奈川地区の旧野麦街道や、峠に建立されている工女の苦難を伝える石碑や石像、島立地区歴史の里に移築・保存されている工女宿宝来屋、そして野麦峠まつりが日本労働ペンクラブにより「労働遺産」として認定されました。

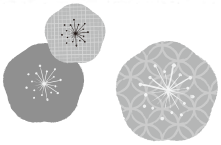
記念の盾には「あゝ野麦峠、殖産興業を支え近代化の礎となった製糸工女の故郷飛騨への道」と刻まれており、野麦峠を大切に守り、歴史を継承してきた地域の取組みが高く評価されたものです。

▲認定証を受け取った皆さん
忠地野麦峠まつり実行委員長（中央）
山口地域づくりセンター長（右から２人目）

1月13日、東京都内で認定交付式があり、同時認定された高山市とともに、野麦峠まつりの実行委員長を務める忠地愛男さんらが出席し、認定証を受け取りました。

また、2月3日に忠地実行委員長が臥雲義尚市長を訪ね、「労働遺産」に認定されたことを報告しました。市長からは「歴史に目を向けながら、地域づくりのさらなる活性化を期待したい」と激励がありました。

野麦峠まつりは昭和58年から続けられ、今年は5月24日に開催予定です。また4月5日には、中町蔵シック館で野麦峠まつりの広報イベント「野麦峠から世界のシルクへ」が開催されます。



大人の社会見学　姉妹都市高山市を訪ねる

3月6日、福祉ひろば・奈川公民館の共催で高山市を訪ねました。

松本市と高山市は、かつて「筑摩県」に属し、松本城に県庁が、高山陣屋に支庁が置かれていた縁で、昭和四十六年に姉妹都市提携を結びました。「飛騨の小京都」とも呼ばれている高山市は、江戸時代に形成された古い町並みが保存されていて、当時の面影を偲ぶことができました。

また、飛騨高山まつりの森では、現代の飛騨の匠たちによる豪華絢爛な平成のまつり屋台等が展示されていて、見事な彫刻や豪華な刺繍幕で彩られた美しい屋台と屋台上のからくり人形の舞などが見学でき、高山市の歴史・文化に触れる大変有意義な時間となりました。

▲飛騨高山まつりの森館内

▲高山陣屋周辺の町並散策

男しょの体力講座

1月5日、仕事始めの日に「男しょの体力講座その6」が行われました。公民館長の掛け声でスタートし、ツボ押しや筋力トレーニング、目の体操などを通して、年末年始で凝り固まった心と体をほぐしました。「春に山菜採りに行くための筋肉をつけましょう！」という先生の励ましに、参加者は笑顔で最後まで取り組み、「今年一番疲れた！」という意見も飛び出し、終始和やかで楽しい講座となりました。

放課後子ども教室 ミニお別れ会

3月4日、奈川小放課後子ども教室では、この春小学校を卒業する六年生に卒業おめでとう！の気持ちを込め、プレゼントを贈りました。子どもたちからは「お友達とできるゲームがたくさんあって楽しかった！」「漫画本があって嬉しかった！」の声がありました。

いつも元気な笑顔で過ごしてくれた子どもたちへ、卒業、進級おめでとうございます。

▲放課後子ども教室はどうでしたか？インタビュー

野麦峠スキー場 親子雪まつり

2月14日、野麦峠スキー場盛りあげ隊主催の「親子雪まつり」が開催されました。

小学生までのお子さんと保護者がペアを組み、親子でリレーする「そり引きレース」や、雪玉をバケツに投げ入れる「スローインゲーム」などに挑戦し、会場は笑顔と歓声があふれていました。

最終種目「雪中宝さがし」のお宝には、ボーナスポイントが隠されていて大逆転もあり、合計得点の上位チームに賞品がプレゼントされました。

学校カフェ

2月5日、奈川小中学校で小学生による「学校カフェ」が開催されました。子どもたちは当日まで試作を重ね、接客の練習もしてきました。招待されたお客様も時間になると続々と集まってきました。注文をして番号札を受け取り、しばし待つこと数分。すると「5番の番号札をお持ちの方、お待たせしました。」と元気な声。

渡す人も受け取る人も笑顔の素敵なカフェ、名前は「ユキノフラワーカフェ」でした。

野麦路

「支えられて、育てられて」

この冬、わが家にもうひとり家族が増えました。賑やかさが増す一方で、長男の心も大きく揺れています。甘えたい気持ちがあふれ、強い癇癪（かんしゃく）になる日もあれば、誇らしげに弟を世話する日もあります。戸惑いながら、「ちゃんと向き合えているだろうか」と自問する毎日です。そんなとき、地域の方のあたたかい言葉やさりげない気遣いに、どれほど救われているか知れません。子どもは親だけで育てるものと思いがちですが、抱っこするのは母でも、見守るまなざしは地域の中にあるのだと感じています。

完璧な母にはなれませんが、この山奥でもきっと大丈夫。そう思える日々に感謝しながら、これからもあたたかく見守っていただけたらうれしいです。

（編集委員）